セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.41

発　行　2005.3.31
編　集　佐賀県立九州陶磁文化館
代表者　古 場 勝 憲
〒844-8585 佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100-1
TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324
http://www.pref.saga.lg.jp/at-contents/kanko_bunka/k_shisetsu/kyuto/
E-mail:kyuto@pref.saga.lg.jp

平成17年4月1日より18時まで開館します。

流掛釉俵壺（ながしかけゆうたわらつぼ）

館蔵資料

肥後・小代焼　17世紀～18世紀

口　　径：4.0cm
高　　さ：19.9cm
胴　　径：24.1×17.6cm
底径(脚間)：14.7×11.4cm

江戸時代初期に肥後の小岱山（現在の熊本県玉名郡南関町）に開窯した小代焼は八代焼と並んで熊本県を代表するやきもので、竜原焼とも呼ばれています。

本資料は、俵形の胴部に小さな口縁が付く特異な形態で、底部に短い脚が四脚付いているのが特徴的です。砂混じりの素地を用い、全体に薄く鉄釉を施し、その上に黄色の灰釉を掛け、さらに柄杓で白い藁灰釉を勢いよく流し掛け文様とする独特の技法が用いられています。

この小代焼は、九州の陶器に大きな影響を与えた朝鮮半島の陶器の伝統的な形態や技法を強く残している点で学術的にも貴重な資料です。

常設特別展のお知らせ

「肥前陶磁にみる京の影響」

○趣　旨

江戸時代の肥前陶磁器の中には、17世紀後半に陶器の世界で一世を風靡した京焼の名工、野々村仁清の影響を受けた仁清風色絵磁器をはじめ、禁裏注文の有田焼・平戸焼、京焼風陶器、献上唐津、現川焼といった京文化の影響を強く受けたものが多くみられます。

この展覧会は、この京焼に代表される京都の瀟洒で雅やかな作風を取り入れた陶磁器の数々を、館蔵品を中心に、一部借用資料を用いて展示紹介いたします。

○主催及び会場
佐賀県立九州陶磁文化館

○会　　期　平成17年９月30日(金)～11月20日(日)
46日間(月曜日休館)

○観 覧 料　無　料

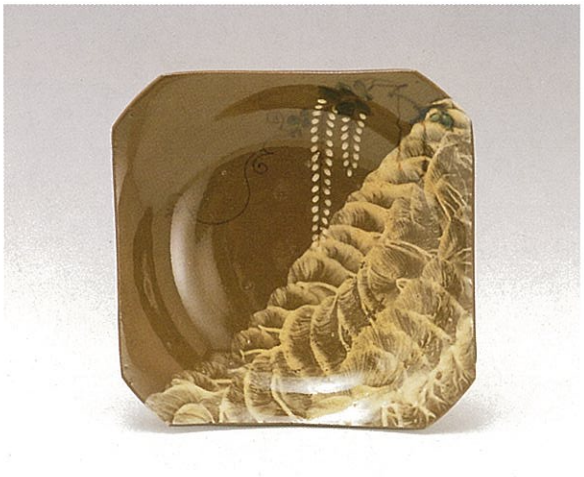
○出品点数　陶磁器　100件　150点

○展示内容　京都の影響がみられる有田焼や禁裏注文の有田焼・平戸焼及び京焼風陶器、献上唐津、現川焼などの肥前陶磁器の特色を５コーナーに分けて紹介します。

○印 刷 物　展示品を掲載したパンフレットを刊行します。

色絵桜花文瓢形瓶　肥前･有田　1655～70年代

染付山水文瓶(京焼風陶器)　肥前　17世紀後半



打刷毛目藤文角切皿　肥前･現川焼　1691～1741年

色絵竹雀花唐草文碗　肥前･有田　1660～90年代

「新収蔵品展」のお知らせ

○会　期　平成17年６月２日(木)～６月19日(日)
○内　容　平成16年度に購入・寄贈により新たに収蔵した資料を紹介します。今回は、初期伊万里の名品である染付山水文瓶、亀山焼では貴重な色絵花唐草文蓋物、小代焼の流掛釉俵壺などを展示いたします。
○展示数　70件　70点（予定）
○会　場　第１展示室

染付山水文瓶　肥前･有田　1630～40年代

テーマ展
「新春展」のお知らせ

○会　期　平成17年12月21日(水)
～平成18年１月15日(日)
○内　容　新春にちなみ肥前や九州の陶磁器のなかからハレの席にふさわしく段重や酒器を選び展示します。
○展示数　50件　70点（予定）
○会　場　第1展示室

染付山水東屋文重箱･瓶　肥前･有田　1670～80年代
上は瓶･下は重箱となっています。

テーマ展(やきものの見方シリーズ２)
「やきものの成形」展のお知らせ

○会　期　平成18年２月８日(水)～２月26日(日)
○内　容　肥前磁器にみられるさまざまな成形技法の特色を分類して、体系的にわかりやすく紹介します。
○展示数　60件　60点（予定）
○会　場　第１展示室

色絵甕割唐子文八角皿　肥前･有田　1670～90年代
ロクロ成形後、土型にかぶせ叩いて成形しています。

テーマ展
「近代の銘款を探る－コレクションの愉しみ－」展のお知らせ

○会　期　平成18年３月21日(火)～４月９日(日)
○内　容　近代の肥前陶磁器にみられる銘款の表わし方の特徴や窯元を探る展覧会です。
○展示数　50件　70点（予定）
○会　場　第１展示室

色絵人物山水文蓋付碗・皿　肥前・三川内　明治

調査研究報告

「鹿児島県で活躍する肥前の大甕について」

昨今は焼酎ブームであるが、佐賀県武雄市などで明治初期に生産されていた陶器製の大甕が、鹿児島県の焼酎製造会社で、また壷漬けで有名な山川漬の生産に今もなお活躍しているのを見てたいへん嬉しく思った。平成16年3月9日から3月11日にかけての３日間の短い期間であったが、数百個ものそれらの大甕を確かめることができたので、ここに簡単な紹介をしたい。

『肥前陶磁史考』（昭和11年　中島浩氣著）ｐ207に次のような記述がある。

「鳴瀬甕焼（なるせかめやき）も同じ橘（たちばな）村（現・武雄市橘町）にて、ここは高橋駅より半里（2㎞）ばかりを隔てし九十余戸の集落である。以前はこの地方を芦原（あしはら）と称せしが、後年檀家の関係にて、今芦原村落は橘村と橋下（はししも）村とに二分されている。明治6年（1873）この地の田中民助、久保忠造、副島平吉等発起して十一間登を築窯し、武内（たけうち）村（現・武雄市武内町）多々良（たたろう）の工人を招き、地元の粘土をもって甕類を焼きしものにて、中には大四石（一升瓶400本分・720リットル）と称する巨器をも製造された。需要地は筑後方面（福岡県）をおもなる得意先とし、また鹿児島の泡盛容器にも供給され、年産額五千余円を挙げたりしが、明治24年（1891）に至って廃窯した」

文中の「鹿児島の泡盛容器にも供給され」た大甕が、今回調査した大甕群の一部に該当するものと思われる。また、武雄市武内町多々良では、現在も金子認（かねこみとむ・日本工芸会正会員）氏が、叩き板（シュレー）と当て木（トキャー）を操って、粘土の紐を積み上げた壷の内外から叩き締めて製作する技術「叩きの技法」を伝えている。金子氏の教示によると、大甕の製作には二人による協同作業が行われていた。一人がロクロのそばに横になって脚でロクロを蹴ってまわし、他の一人がロクロの上の大甕を「叩きの技法」で作る。天井からは火鍋が吊るされ、甕の内面を乾燥させる。また、甕の胴の外回り中ほどには、補強のために数本の藁縄が巻きつけられる。

焼酎の製造工程は、写真1に見るように、「①原料米⇒②米蒸し⇒③こうじつくり⇒④一次仕込み⇒⑤二次仕込み／／①さつまいも⇒②いも洗い⇒③選別⇒④いも蒸し⇒⑤二次仕込み⇒⑥モロミ運び⇒⑦蒸留⇒⑧冷却⇒⑨貯蔵」と紹介されている。ここで肥前の大甕が活躍するのは一次仕込み、二次仕込みの工程と、貯蔵においてである。

写真１「焼酎のできるまで」解説板
「薩摩酒造文化資料館明治蔵」

写真２　仕込み甕
65個が整然と並ぶ。
「濱田屋伝兵衛酒造」

写真３
甕の中で焼酎が醗酵している。
「本坊酒造株式会社津貫工場」

写真４　長期保存甕
20個が並ぶ。
「濱田屋伝兵衛酒造」

工場の中では、写真2のように大甕（仕込み甕）は整然と並べられ、その中には写真3のように、原料が醗酵しているのを見ることができる。工場内は醗酵する焼酎の甘い香りが漂っていて、アルコールに弱い人は見学中に酔ってしまうかもしれない。焼酎は長い時間貯蔵すると、熟成が進み、まろやかで口当たりの良いものに仕上がる。最低でも3年、長いもので10年といった長期にわたる貯蔵が大甕（長期保存甕）で行われるという。直射日光を避け、蔵の片隅で静かに、ひたすら時を刻んでいる（写真4）。

「濱田屋伝兵衛酒造」　鹿児島県日置郡市来町湊町3030番地　創業は明治元年

ここに少なくとも178個の肥前の大甕が使用、あるいは展示されている（写真5）。いずれも形式は同一で、およそ口径は80㎝　高さ120㎝位。口の内面にかえしがあり、首は外反する、首に三条の筋がはいる。容量は600から700リットルという表示であった。甕は肩

写真５
焼酎工場の玄関に据えられた大甕　高さ128㎝
「濱田屋伝兵衛酒造」

まで土中に埋設し、発酵時に発生する熱を冷却し、一定の温度に保つとのこと。甕を使用する昔ながらの製法は、近年およそ５年の傾向であり、それ以前にはもっぱら琺瑯タンクが使用されていたという。いわばリバイバルで伝統製法の甕仕込が見直されているとのことであった。20日くらいで焼酎が醸造できるとのこと。

「キンコー醤油株式会社」　鹿児島市南栄３丁目13番地　明治20年創業

工場敷地の空き地に12本もの甕を伏せていた。かつて焼酎の醸造用に使用されていたものを譲ってもらい、酢の醸造に使用していたとのこと（写真6）。

写真６
かつて酢の醸造に用いられ、現在は役目を終えて休息する12個の大甕
「キンコー醤油株式会社」

「高良酒造有限会社」　鹿児島県川辺郡川辺町宮4340　創業は明治末ころ

９月に仕込んだものが終了し、現在洗浄中の甕が60個埋設されていた。甕の由来については、「天草から来た甕と聞かされていた」とのこと。「加世田の湊から万世新川というところまで船で輸送しここまで運ばれた」と聞いているとのことであった。

「本坊酒造株式会社　津貫工場」　鹿児島県加世田市津貫6594番地　明治５年創業

農産加工を前身とし創業開始。甕の仕込み蔵を一昨年前に建てる際に、甕を業者より仕入れた。そのうち半分はあちらこちらから収集した甕を利用したもので、もとからここにあった甕ではないとのこと。看板用に４本の甕を設置し、ほかに仕込み蔵の甕は74個もの甕が使用されている。

「薩摩酒造文化資料館明治蔵」　鹿児島県枕崎市立神本町26番地

大手の焼酎醸造メーカーが経営する資料館で、仕込み蔵には96個と50個の甕が創業期のまま現在に至る形で埋設されて使用されている。展示用に玄関に飾っている甕を計測すると、口径87.5cm　胴周297.5cm　高さ120.5cm。仕込み量はだいたい肩までいれて530リットル。駐車場にも多数の甕を陳列する（写真7）。

写真７
駐車場に伏せて並んだ大甕群
「薩摩酒造文化資料館明治蔵」

「日本澱粉工業株式会社　漬物の里」　鹿児島県揖宿郡頴娃町別府845番地

当地の名産品山川漬（壺漬）を紹介展示販売する施設。もとは焼酎の甕かと思われる甕を使用して30年前から漬物をはじめているという。漬物部屋には46個の甕が埋設されて、漬け込みがされていた（写真8）。１個の甕に原料はおよそ400kg入る。

写真８　46個の大甕
１個に４００kgの山川漬の原料が入っている。
「日本澱粉工業株式会社　漬物の里」

「有限会社　上薗物産」　鹿児島県揖宿郡山川町大山迫後６－２　昭和51年創業

甕は農家作物を保存している甕を譲ってもらったという。かつて、家庭用には琉球産の三耳壺が壺漬け（山川漬）に使用されていたという。口がせまいほうが風味が逃げず、美味しく漬かるという。およそ１年から３年漬け込むという。２年ものが良い味がでるとのこと。41個の甕がある。最大のものを計測すると、口径99.5cm×91cm　高さ（深さ）119cm。この甕におよそ800ｋｇ漬け込めるという。

「内薗賢商店」　鹿児島県揖宿郡山川町福元6532番地　40年ほど前に創業

焼酎醸造元（鹿児島県内）から甕を購入したとのこと。当時、観光業が盛んとなり、地元名産の漬物を量産するようになる。同時期に焼酎醸造元は甕仕込みから琺瑯タンクへと移行しつつあったので、甕を購入することができた。それ以前は、現在「酢甕」とよばれている琉球産あるいは苗代川産の四耳あるいは三耳の壺を用いていたという。

この山川漬製造元ではおよそ140個の甕で山川漬を製造しているが、さらに別の棟ではおよそ100個の甕を使用しているとのこと。１個の甕で400～500kgが製造できるという。

調査に際して、鶴田道正氏をはじめ、御協力いただいた方々、大甕の御所蔵家の方々にお礼を申し上げます。

（吉永陽三　当館学芸課長）

平成16年度特別企画展の報告

「初期伊万里展－染付と色絵の誕生－」

○主　　催　佐賀県立九州陶磁文化館
　　NHK九州メディス
○会　　場　佐賀県立九州陶磁文化館
　　第１～第３展示室
○会　　期　平成16年９月11日(土)
　　～10月24日(日)44日間(会期中無休)
○出品点数　228件　287点　重要文化財３件(３点)を含む
○展示内容

本展は、陶磁器愛好家に高い評価を受けている江戸時代初期の肥前磁器の草創期から初期における染付と色絵を紹介し、初期伊万里の魅力に迫りました。

展示は２章に分かれ、第１章では、初期伊万里の染付や古九谷様式とも呼ばれる色絵の名品を展示し、第２章では、近年の調査で初めて明らかになった、肥前磁器の日本海航路経由の流通を示す伝世品や出土資料も展示するなど新しい視点から企画しました。

初期伊万里や初期色絵の名品を一堂に展示する展覧会は全国でも例がなく、来館者は、大胆な構図、豪快な筆さばきの染付や色鮮やかな五彩手、重厚な青手など初期伊万里や初期色絵の魅力を十分堪能されているようでした。

関連行事として、記念講演会（講師：当館副館長大橋康二）を10月２日(土)に、記念茶会を９月25日(土)に、学芸員による展示解説会を９月18日(土)・９月25日(土)に開催しました。

なお、本展覧会は、巡回展として当館以外に山口県立萩美術館・大阪歴史博物館・上越市立総合博物館・サントリー美術館でも開催され好評でした。

開会式後の展示解説の様子

展示状況

展示状況

平成16年度の展覧会から
第101回九州山口陶磁展

○会　　期　平成16年４月29日(木)～５月９日(日)
　　11日間

明治29年に「有田陶磁品評会」として発足した本展覧会は、九州山口各県の優れた陶磁器作品を一堂に展示し、伝統的工芸の継承と陶磁器産業の発展を期することを目的として今回第101回目を迎えました。

今回の展覧会では、第１位の中島康夫氏の「2004-3」を始め、91点の入賞･入選作品と過去25年の第１位作品を展示しました。また、韓国の若手陶芸家20人の作品を特別展示しました。

展示状況・学芸員による展示解説

古唐津と太郎右衛門窯展

○会　　期　平成16年８月３日(火)～８月26日(木)
　　24日間
○主　　催　佐賀新聞社、日本経済新聞社
　　当館　特別協力

御茶碗窯開窯270周年を記念して開催された本展覧会は、中里逢庵氏（13代中里太郎右衛門）の監修により、全国から集めた唐津焼の名品69点と中里無庵（12代中里太郎右衛門・重要無形文化財）から14代までの作品67点の合計136点が展示されました。

重要文化財「絵唐津松文輪花大皿」「絵唐津芦文壺」をはじめ、「彫唐津茶碗　銘『玄海』」など古唐津を代表する名品や歴代中里家の名品が一堂に展示されるのは県内で初めてのことであり、来館者は唐津焼の名品を１点１点熱心に鑑賞されていました。８月７日(土)には中里逢庵氏による展示解説会が行われ、多数の参加者が逢庵氏のわかりやすい解説に聞き入っていました。

中里逢庵氏による展示解説の様子

第２回日韓交流展

○会　　期　平成16年８月31日(火)～９月５日(日)
　　６日間

文化や生活環境の異なる中で現代生活に密着したやきもの製作に励んでいる陶芸作家達のありのままの姿を伝えたいと念願して、佐賀大学、国民大学校出身の若者の有志が企画した展覧会を開催しました。

日本10名、韓国12名の陶芸家の作品50点が出品され、日韓の若手陶芸家達による陶磁器による21世紀の日韓交流の幕開けとなりました。

展示状況

テーマ展「寄贈品による名品選」展

○会　　期　平成16年11月９日(水)～12月12日(日)
　　34日間

当館が所蔵する約5,900件の寄贈資料のうち柴田夫妻コレクションを除いた約1,500件の中から肥前磁器を中心に厳選した32件74点を４つのコーナーに分けて展示しました。口径が41cmもある「染付松竹梅文大皿」（古伊万里延宝様式）、色絵の鮮やかな「色絵花束文皿」（鍋島藩窯様式）、東ドイツ政府より寄贈された「色絵岩梅竹虎文大皿」（柿右衛門写し）など、格調高いこれら磁器の一つ一つに寄贈者の陶磁器に対する深い愛情が窺えました。11月30日(土)には学芸員による展示解説会も行いました。

展示状況

新春展「干支　酉の文様」展

○会　　期　平成16年12月15日(水)
　　～平成17年１月16日(日)　33日間

平成17年の干支である「酉」にちなみ、鳥の形や様々な鳥が描かれた陶磁器を紹介する展覧会を開催しました。ヨーロッパ輸出用として胴部に鶏が彫刻装飾された「色絵花鳥文瓶」、雉を模した愛嬌のある「瑠璃釉鳥形合子」、器形を生かして鶴の姿をデザインした「色絵松鶴文小皿」など、見ていて楽しくなる資料を多く展示しました。観覧者にも大変喜ばれ、年始を飾るにふさわしい展覧会となりました。

展示状況

シリーズ
やきものの技法(36)
釉裏紅・辰砂

酸化炎焼成によって緑色に発色し、還元炎焼成によって赤く発色する銅の性質を利用して、透明釉の中に呈色剤として銅を含ませて赤い釉薬として用いたものを「辰砂釉」、そして、透明釉の下に銅を含む絵具によって文様をあらわしたものを「釉裏紅」と呼びます。

本来、「辰砂」は硫化水銀の俗称であり、朱色をしているために、その色になぞらえて紅色をしたものを辰砂と呼んでいます。

白磁釉の中に銅を含ませ、紅色に呈発させる手法は、中国では「紅釉」といい、紅釉は、北宋時代に定窯で作られた「紅定」がその起源とされます。元時代後期には景徳鎮民窯でも「紅釉磁」が開発され、明時代の洪武年間(1368～98)の宮廷磁器に紅釉が作られました。

紅釉は以後、明・清時代を通じて「牛血紅」・「桃花紅」などさまざまな作風の紅釉磁が作られました。

肥前磁器における「辰砂釉」は清六の辻1号窯、清六の辻大師堂横窯、小溝上窯など磁器創始期の窯で陶片が出土しており、染付作品の一部分に辰砂釉を施したり、青磁壷の口縁部や頸部に辰砂釉を塗り巡らす例が見られます。

「釉裏紅」については、その初源的なものは晩唐の五代時代(9～10世紀)にみられ、元時代後期(14世紀)になって景徳鎮窯で製作されました。

朝鮮半島では、高麗時代後期（12世紀後半～13世紀）に、青磁釉下に銅で文様が筆描で表わされ、朝鮮時代後期(18世紀)には民窯の白磁で釉裏紅が流行しました。

肥前磁器における「釉裏紅」は初期伊万里の時期に盛んに製作されています。染付と併用して筆で文様を表現したものと、青磁などの口縁部などに塗ったものなどがあり17世紀前半の猿川窯や広瀬窯などにも見られます。しかし、銅は高温化では揮発しやすいので、文様が安定して表わされることが難しいため、17世紀後半以降は例外を除いて行われなくなります。

（吉永陽三）

染付辰砂楼閣山水文壺
有田　1670～90年代

シリーズ
やきものにみる文様(36)
地図文様

肥前磁器では、地図文様は江戸時代後期になって出現し、大皿の文様として用いられています。地図文は、ほとんどが染付けで描かれていますが、まれに染付けと色絵で描かれたものも見られます。

地図文様が描かれた大皿は、日本を中心として東半球や東洋を描いた「世界地図文大皿」と、日本列島を描き筑前国や肥前国といった国名が記された「日本地図文大皿」の二種類に大きく分けられ、さらに日本地図から九州だけを抽出して描いた「九州地図文大皿」もあります。

「日本地図文大皿」の器形は円形の他に、輪花・隅丸長方形・分銅形があり変化に富んでいますが，描かれている地図文はほぼ同じものであり、同一の手本（地図）から写されたものと考えられます。

写真の大皿は「世界地図文大皿」で、高台内の「本朝天保年製」銘から江戸時代の天保年間に制作されたことが判ります。日本を中心に中国大陸・朝鮮半島・アメリカ大陸などが描かれ、海はダミ塗りされた波文で表現されています。

「大清」「朝鮮」「ヲロシア」「イギリス」などの国名や「北アメリカ」「欧遍巴」などの地名と日本からの距離が「日本ヨリ海上里数表」で記されています。「女人国」「長人国」など実在しない国も記されているのが特徴であり、鎖国体制下にあった当時の日本人の世界観がわかる興味深い資料です。

当時、通商を求めて外国船が日本近海にたびたび出没しており、このような世情を反映して、世界地図が大皿の図案として描かれたものと思われます。

色々な料理がのせられたこの大皿を囲んで人々が海外への憧れに思いをはせていたかもしれません。

（森田孝志）

染付世界地図大皿
有田（窯ノ谷窯）　天保年間（1830～43年）